

C-63 造花の系譜(三) 記紀における「カツラ」と万葉への推移

昭和女大短大 ○岡野都 醍醐るり子

目的 報告(一)で述べたように、記紀におけるわが国の頭部装飾の初期形態として「ウズ」と「カツラ」の二系列をあげることができ、そのうち造花の祖形として考えられたものは、「ウズ」であった。続いて報告(二)で「ウズ」の発展形態である「カザシ」を検討していくうちに、「カツラ」もまた本来の用い方から「カザシ」と同義語的な存在に変容してきているので、造花の系譜の列外におくべきでないと考え、今回は記紀を中心とした「カツラ」と万葉への推移について述べる。

方法 報告(一)、(二)と同様。

結果 1、「カツラ」の関連語には黒髪、黒御縵、縵、黒鬘、眞折の縵、眞坂樹の鬘、賢木の縵、御蔭、御冠、押木珠縵、縵、花縵があげられる。2、カツラの語源は鬘・鬘連・鬘列など、「カ」は鬘、「ツラ」は鬘の交替形または鬘につける、つらねるとした説と、力鬘として「カ」を美鉢の接頭語とした説がある。3、起源は①蔓草の生命力を自分の体に感染させようとした呪術的意義、②鉢巻のように鬘の乱れを防ぐための実用的意義、③神祀りのための小道具や神事に奉仕するしるしとした信仰的意義が認められたが、身分の象徴を意味するものもあり、万葉への推移とともに装飾的、遊興的要素が濃くなる。4、カツラは古代男女の鬘飾りであるが、記紀では男子に関する記事が多く、万葉ではカツラの種類が多様化するにつれ女性もよく用いられている。用い方は鬘に懸けて垂らす、頭に巻くなどして、頭に挿し立てるウス・カザシとは異なっている。